

GSMで暮らし楽しく

名付け親の三重野さん語る 群大理工学府などが講演会



桐生でおなじみの低速電動バス「マユ」など、時速20キロ未満で公道走行できる電動小型車両「グリーンスローモビリティ」(GSM)を活用し、もっと楽しい地域づくりを考える講演会がこのほど、桐生市市民文化会館(美喜仁桐生文化会館)第1会議研修室で開かれ、東京大学特任准教授でGSMの名付け親でもある三重野真代さんが、人らしい暮らしを取り戻すためにも「ゆっくり」の価値を取り入れようと、聴衆に呼び掛けた。

群馬大学理工学府の主催、高橋産業登山研究財団・2015年からの生活交通をつくる会の共催で開かれた。

「遅い」は他者との比較だが、『ゆっくり』は自分の感覚」と説明した三重野さんは、「他者との比較から抜け出すことが大切」と指摘。世界のト

レンドである低速化をテーマに、国内外の都市で展開されているGSMの導入事例や、歩行者中心のまちづくり政策を紹介した。

昨秋訪れたパリでは、市街地30キロ、中心街20キロという速度区分がある。「自動車は歩行者に迷惑をかけてはいけない」という発想

「低速化は世界のトレンド」と語る三重野さん(桐生市市民文化会館で)

移動手段もオープン

が基本。「乗客や運転者同士、顔が見える方が安心できるし、安全性も高まる」とも。翻って日本では、歩道のある道は15%。市道では歩行者のスペースは十分でなく、シニアカーの走る場所さえないのが実情だ。

「人と車の共存は30キロでも危ない」と三重野さん。静かな街はい街であるという視点も考慮し、「まずは小さなエリアからゆっくりに実現しては」と、マユの生まれ故郷でもある桐生の聴衆に呼び掛けた。

が、低速化につながっている」と三重野さん。人の顔が見えた方が、まちは楽しいという視点から、「車道を歩道や自転車道に転換し、まちなかに緑を増やす動きが活発」という。マルシェも増え、買い物をする男性の姿もまちなかに増えたという。「車を気にせず歩ければ、子どもたちも活発に動ける」